

教育研究業績書

2023年05月08日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：西山 直毅

| 研究分野 | 研究内容のキーワード | |
|------------------------------|--------------------------|---|
| 精神看護 | 受容、共感、心理的安全性 | |
| 学位 | 最終学歴 | |
| 修士（看護学） | 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程 | |
| 教育上の能力に関する事項 | | |
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 1. 精神看護学実習 | 2020年10月～現在 | 精神疾患・障害を持つ対象者とのかかわりを通して、対象者がかかえている困難を理解し、対象の健康回復にとって必要な看護を考えることができるよう、各実習施設との調整をおこなった。 コロナ禍における感染症対策を講じると共に、普段接する機会の少ない精神科疾患をもつ対象者との関わりにおいて、不安や悩みをかかえる学生がいれば少しでも自身の思い・考えを吐露できるよう工夫し、学生の関心が対象者に向かいやすい環境作りを心掛けている。 |
| 2. 精神看護学Ⅱ | 2021年4月～現在 | 精神疾患や障害を持つ人に対する看護アセスメントの考え方を身につけることを目的とした演習にかかわった。 事例展開では、学生が提出する課題を確認し、個々の学習状況に応じて学びが深められるよう、フィードバックを行った。 また、精神科における身体ケアの実際、身体拘束の演習では、臨床での経験をふまえながら主担当として講義・演習を行った。 |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| 1. 行動制限と人権：身体拘束の実際（精神看護学Ⅱ） | 2021年6月 | 行動制限という、どうしても負のイメージをもたれやすい看護技術について、医療的視点での必要性や注意点を伝えるのみでなく、対象者の人権や実際の患者・援助者の心身の負担への配慮まで含めて学生が考えられるよう工夫した。 教科書に準じながらも、文字のみの固い学習にとどまらないよう、臨床での経験も反映させた教材作りを意識した。 |
| 2. 精神科における身体ケアの実際（精神看護学Ⅱ） | 2022年7月 | 心理的側面へのケアが中心ととらえられがちな精神科看護において、疾患そのものや薬の副反応からくる身体的側面へのケアについて、重症化リスクや発症頻度の点から、重要度が高いものを優先して学習できるよう工夫した。いずれのケアについても「症状が生じる原因」「実際に生じる症状」「実際のケアの仕方」が項目立てて学べるよう意識した。 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| 1. 学生委員（武庫川女子大学） | 2020年10月～2021年3月 | 異なる学年の学生同士、また学生と教員の交流が深められるよう、学生幹事懇談会や学生交流会を企画・実施した。 |
| 2. キャリア委員（武庫川女子大学） | 2020年10月～2022年3月 | 学生の就職活動を支援するため、各実習施設合同での就職説明会の学内での実施や、就職活動に関する先輩との質疑応答機会の調整等をおこなった。 また、小論文の添削や模擬面接を実施し、少しでも学生が自信をもって実際の就職試験や面接に臨めるよう支援した。 |
| 3. 国試対策委員（武庫川女子大学） | 2021年4月～現在 | 各学年に応じたガイダンスでの情報提供にて、入学から国試本番まで切れ目のない支援を意識している。 個別面談にて対策の進捗状況や困り事を学生と話し合 |

| 教育上の能力に関する事項 | | | | |
|---|------------|-----------|---|--|
| 事項 | 年月日 | | 概要 | |
| 4 その他 | | | | |
| 4. 看護学ジャーナル編集委員（武庫川女子大学） | 2022年4月～現在 | | <p>うことで、程よい緊張感と計画性をもって長丁場を乗り切られるよう支援している。</p> <p>また、4年生を中心に模試や解説講座を学内にて受けられるよう調整したり、臨地実習で受け持つ患者の疾患とリンクした学習を意識してもらおう声をかける等、心理面でのフォローみならず、着実に知識を積み重ねていけるよう学習支援に取り組んでいる。</p> | |
| 職務上の実績に関する事項 | | | | |
| 事項 | 年月日 | | 概要 | |
| 1 資格、免許 | | | | |
| 1. 看護師免許 | 2011年4月～現在 | | | |
| 2 特許等 | | | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | | | |
| 4 その他 | | | | |
| 研究業績等に関する事項 | | | | |
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1. 精神科急性期領域で働く看護師の、異和感を感じた際の対処の仕方に影響を及ぼす要因と看護への影響 | 共 | 2020年3月 | 大阪大学大学院医学系研究科博士前期課程 保健学専攻、修士学位論文 | <p>精神科急性期領域で働く看護師を対象に、患者との関わりの中で異和感を感じた際に、どのように対処し、結果としてどのように看護に影響を及ぼしていたのかインタビュー調査を行った。</p> <p>その結果、異和感を感じながらも一人で悩みを抱え続け、スッキリしない思いのまま患者とは業務的な関わりのみとなっている事例が複数生じていることが明らかとなった。周囲に相談できた事例では、援助者自身の気持ちがスッキリしたこともあり、業務的な関わりに加え、患者と治療的コミュニケーションを展開できるようになっていた。</p> <p>看護師が業務的な関わりに加え、治療的コミュニケーションを展開していくためには、異和感を生じた際に看護師自身が周囲に相談しやすくなるための環境を整えていく必要性が示唆された。</p> |
| 3 学術論文 | | | | |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 1. 精神科救急・急性期病棟で働くスタッフの、精神科急性期治療パス活用の現状 | 共 | 2016年9月 | 第47回日本看護学会学術集会 | <p>精神科救急・急性期病棟で働くスタッフを対象にしたアンケート調査を実施。その結果、精神科救急・急性期病棟の臨床現場で働くスタッフは、急性期パスに則り急性期症状のアセスメントについては意識して取り組んでいた。一方で、急性症状を脱してからの回復期・地域への移行期では多職種との連携において不十分な面がみられた。病棟内で得られた患者の様々な情報について、退院を見据えて病棟スタッフが地域に発信していけるための支援の必要性が示唆された。</p> <p>西山直毅、辻原忍、斎藤雄一</p> |
| 2. The effect social support has on depression after risk factors for depression have been adjusted | 共 | 2020年1月 | 23th. East Asian Forum of Nursing Scholars | <p>うつこのリスクファクターを調整した上でのソーシャルサポートがうつこの症状に与える影響について量的研究をおこなった。</p> <p>GDSを目的変数、LSNS、死別の有無、PSQI、PSSを説明変数としてロジスティック回帰分析をおこない、GDSとLSNSの関連について検証した結果、ソーシャルサポート（LSNS）は、うつこのリスクファクターである死別、睡眠、ストレスを調整しても高齢者のうつこの症状と有意に関連していた（オッズ比：0.60 [95%CI：0.37～0.94]）。</p> <p>高齢者が孤独死や自殺といった形で人生の終わりを迎えるリスクを</p> |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|-------------------------|-------------|--|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 3. 精神科急性期領域で働く看護師の異和感を感じた際の対処のプロセスに影響を及ぼす要因と看護への影響 | 共 | 2020年12月 | 第40回日本看護科学学会学術集会 | <p>軽減していくために、社会全体が高齢者へのソーシャルサポートの重要性をより一層認識していく必要性が示唆された。</p> <p>Naoki Nishiyama, Haruka Tanaka, Eri Kiyoshige, Kei Kamide, Yoshimi Endo</p> <p>精神科急性期領域で働く看護師を対象に、患者との関わりの中で異和感を感じた際に、どのように対処し、結果としてどのように看護に影響を及ぼしていたのかインタビュー調査を行った。</p> <p>その結果、異和感を感じながらも一人で悩みを抱え続け、スッキリしない思いのまま患者とは業務的な関わりのみとなっている事例が複数生じていることが明らかとなった。周囲に相談できた事例では、援助者自身の気持ちがスッキリしたこともあり、業務的な関わりに加え、患者と治療的コミュニケーションを展開できるようになっていた。</p> <p>看護師が業務的な関わりに加え、治療的コミュニケーションを展開していくためには、異和感を生じた際に看護師自身が周囲に相談しやすくなるための環境を整えていく必要性が示唆された。</p> <p>西山直毅、田中晴佳、遠藤淑美</p> |
| 4. アディクション看護における価値観についての理論的考察 A.H. マスロー理論の文献検討より | 共 | 2022年12月 | 第42回日本看護科学学会学術集会 | <p>「アディクションからの回復や回復支援に及ぼす価値（観）の影響」についての研究において、「価値（観）」が感情や行動に及ぼす影響についての理論的考察を行った。</p> <p>「価値」に焦点をあてた理論書等の中からA.H. マスローの理論を取り上げ、文献検討を行った結果、今回対象とした書籍からは、ユーサイキアとB価値との関係の明確な記述を見出せなかった。しかし、人生に意味をもたらす、本質的あるいは究極的な価値であるB価値は、ユーサイキア社会の大切な価値であると考えられた。</p> <p>マスロー理論における価値の考え方については、今後「アディクションからの回復や回復支援において、当事者や支援者の「価値（観）」が当事者の回復に及ぼす影響」についての検討をすすめるにあたり、意義あることであることが示唆された。</p> <p>實田穂、茅喜田恵子、谷口俊恵、西山直毅</p> |
| 5. Presence of “shame” in addiction recovery support -A review of national and international medical literature - | 共 | 2023年3月発表予定 | 26th. East Asian Forum of Nursing Scholars | <p>アディクションに関する国内外の医療系文献を検討し、アディクションの回復や回復支援における「恥」が及ぼす影響について、アディクション看護の視点から考察した。</p> <p>国内では恥に着目した研究はほとんどなされていなかった。一方で、国外においては恥やguilt、抑うつなどの要因との関係が検討され、恥に着目した介入研究がおこなわれていた。</p> <p>日本は「恥の文化」（1946）と言われ、日本において、アディクションからの回復に「恥」の影響は大きいことが考えられる。海外での知見をもとに、日本の文化の中でのアディクションからの回復における「恥」の影響や回復支援への活用を検討していく必要性が示唆された。</p> <p>Naoki Nishiyama, Minori Takarada, Toshie Taniguchi, Keiko Takita</p> |
| 3. 総説 | | | | |
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| 1. 薬物依存症の回復支援と価値観の変容 —当事者と看護職者の語りから— | 共 | 2021年4月～ | 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）） | 共同研究者：實田穂（研究代表者）、茅喜田恵子、谷口俊恵、西山直毅 |
| 学会及び社会における活動等 | | | | |
| 年月日 | 事項 | | | |
| 1. 2021年4月～現在 | 日本精神保健看護学会 研究活動推進委員会 | | | |
| 2. 2022年4月～現在 | 第33回日本精神保健看護学会学術集会 実行委員 | | | |